

風土

5



墨流し

神蔵

器

ふるさとや雲の切目に仏生会

遺書めけり椿を植ゑて柿植ゑて

さくら咲く海に出るまで滑川

屋根替の煤のままつこ水に星

亡き兄の道おいてゆくすみれ草

喫線侵すグラスに胡蝶椿かな

月光の金縛りにあり葱坊主

白木蓮燭とす衆生来迎図

囲ひ解くすでに牡丹の朱の炎

念仏の六時礼讃地虫出づ

梅咲くや水に広がる墨流し

春水の行方は知らず真砂女逝く

竹間集

同人作品



夕 東 風

門 伝 史 会

鎌倉に十井十橋木の芽張る
一つ餌を引きあふ雀春早し
江の電のまくら木歩く木の芽晴れ
高垣かしくねの白櫛五本笹子鳴く
薄氷のゆらぎ刃物の匂ひせり
目のとどく先に子等みて小草の芽
夕東風やインクの付きし手を洗ふ

「櫛」以後（三十一）

野沢しの武

雪吊を解き藪巻も解きにけり
雪吊を解きぬし庭師もうをらず
地下映画劇場にをり啄木忌
きつかけはがうなを貰ふ話より
草餅や久しく逢はぬ姉のこと
蔵の屋根に梅より高く人登る
読みぬし書手より逃げゆく目借時

遠 霞

鈴木 石花

家継ぎし姉の納骨春時雨
下萌にいふこときかぬ小犬かな
犬の名をソラと改め山笑ふ
デージーやヴェルサイユ展のナポレオン
茨の芽フオーレ・レクイエム暗誦す
風光る上野の森に四部合唱
飛鳥への旅近づきし遠霞

冬 牡丹

山路 紀子

風花や値を見て戻す黒織部
雪女郎向うの岸に佇つてゐる
鳶口にどんだの燗を広げけり
待春やはなびら餅の紅透けて
一重八重奥に千重の冬牡丹
正座して建国記念の日なりけり
声の出ぬ母の喉笛春寒し

若布干し

岩木 茂

日本海のいろとなるまで若布干す
栈橋の板を鳴かせる若布干し
烏雲に入る板栈橋に潮満ちて
春障子開け父の忌の日に入る
四年前よりこの墓所のこの路の臺
春眠の部屋より洩るる日のひかり
畦焼いて焦がす国府の礎石かな

雪間草

佐藤よしい

何もかも峠越え来る雪間草
野を焼きて細き流れの音通す
物売りがふえて三極花日和
ふるさとの眠りふかぶか月朧
鳥声や春あけぼのの夢の旅
新しき机桜の芽吹きどき
菜の花を食べて遠くへ眼のとどく

かげろふ

相沢有理子

梅園をゆつたりと夫在らばこそ
傘煽る雨伴ひし春一番
潮風を帯びし瓦斯灯おぼろなる
行くさ来さ春潮蹴立てタゲポート
潮待ちの舟や栈橋かげろひて
青天を区切る中庭花こぶし
ゆくゆくは子に譲る居の春暖炉

梅 探 る

— 南 うみを —

止め石に霜のひかりやにじり口
枯蓮やちらばる水に日のひかり
現はれて寒鯉の水匂ひけり
胡麻豆腐寒の水にて固めしと
梅探る熾る炭火のかぐはしく
剃りたての僧のつむりや薄氷
おみくじの咲き満ち梅は蒼なり
梅が香やあかき床机に京の酒
大釜に湯玉躍りぬ梅花祭
紅梅を嗅ぐなり両手ポケットに

竹の幹紅き椿にひたと触れ
くらがりを箒の音や紅椿
うぐひすや煮つめて小魚あめ色に
箸はじめ菜の花和への小鉢より
遊ぶ子の触れてふくらむさくらの芽
すみれ咲き墓のうしろにをんなの子
草はらを投網のしづく鳥の恋
山女の子一尾おどろきみな散りぬ
荒鋤きの土の匂へる霞かな
おぼろ夜の京に烏帽子御用達

山河集

同人作品



神蔵 器選

河豚捌く包丁と水光りあふ
十井 三乙

学校を真ん中に置き冬晴るる
雪原に動くものみな影を持つ
酔海鼠や力入らぬ歯のありて
太梁のぴしと鳴りたる空う凍ばれ

代田 青鳥

まんさくや風に威を張る鬼瓦
塗り立ての郵便ポスト春時雨
ピロシキの袋染み出す春しぐれ
春めくや母の行李に背負紐
わうわうと常陸利根川土筆生ふ

工藤ミネ子

ばたばたと朝市たたむもどり寒
白鳥の脇の真白き帰心かな
力抜くことのはじめや牡丹雪

白鳥の首さしのべて寄り来たる
鳩水の真ん中制しけり

厄塚といふ新柱藁匂ふ
残り火に添ふ火掻き棒節分会
橋添やよひ

吉田神社

節分や八百万神一堂に
声低き懸想文売り近付き来
春浅き京都大学時計塔

吉永すみれ

年迎ふ手斧けづりの太き梁
寒怒濤とどく鐘楼ぼけ参り
枯原に風が寄道してゆきぬ
山火燃ゆ蠟人形館まなかひに
冬ぬくし魯山人展人あふれ

◇特別作品◇

身辺

禅
京子

けふ春の雀あつまる朝日かな
采女橋 仙台橋や春の立つ
四十雀の囀り初めし空のいろ
白猫の声のしめりや迎春花
むら雲や早春の野に耳たてて
野遊びのヘッドホンよりジャズピアノ
うすうすと酔うたる人と梅見かな
かの子忌や胸に真珠パールをあたたためて

職人と朝の茶を飲む柳の芽
竣工の施主のはおれる春コート
なりはひの今朝は芽吹きて雑木山
大寺や紅梅にあめ鴟尾に雨
銀縁の女医の名札や黄蝶来る
大壺へ挿し収らぬ桃の花
うららかや鳶の螺線のなほひくく
突堤や小さき入江に若布干す
春ならひ枝打ち鳴らす墓域かな
道草やユニクロに買ふ春のシャツ
筆ひちりき 築き に袍の錦地冴返る
浮岳山深大寺門梅真白

風土独語／神蔵 器



昼月や加曾利の丘の蓬摘む

小林 共代

加曾利は加曾利貝塚である。千葉市桜木町にあり、北貝塚直径百三十メートル、南貝塚直径百七十メートル、二つの貝塚は8の字形に結ばれている。日本最大級の規模で、縄文中期から後期のものとみられている。

私は、この句の加曾利という関東では珍しい固有名詞に注目した。はつきりしたことは解らないが、昔は現在の千葉市あたりまで常陸国に入っていたのか、常陸国がかそりと言ったという記録が残っている。かそりはじかばち（以我蜂）の異名、さそり蜂が多かったので、かそりが丘といったともある。

掲出句は一読するとき、大宮人のような優雅な野遊のさまが浮かぶが、縄文人の生活は狩をし、海のもの^{サカナ}を漁り、さそり蜂など多い中に縁を求めて生きて行かなければならなかった。現代の生活が平和で豊かに恵まれていればいるほど、遠い先祖の人たちのくらしが偲ばれ、摘む蓬の一つ一つにもいよいよ遙かなる思いにかられたのではないだろうか。

曼陀羅や腕にかけたる春コート

大森 美恵

春コートがよい。もしこれが同じように腕にかけたものでも、冬のコートであれば、私はここで取り上げる気にならない。

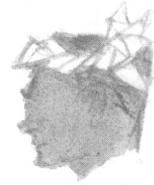
京か若狭か、それとも亡きご主人の故郷の与謝郡あたりであろうか。少なくとも曾遊の地ですでに何回か訪れたことのある古刹であろう。一人曼陀羅図の前に春コートを脱ぎ、腕に長く垂れて静かに立ち尽くしている。その立ち姿は何とも魅力的で、日本画を見ているようである。私の力ではとてもその魅力は表現できない。ただ一つ言えることは、明るさ、美しさの中に早春のかすかな冷たさがあるように、そこはかとな陰影ではなからうか。言いかえれば、それは曼陀羅というより、彼女自身の積み重ねた年輪が放つ微光であり、人間性の深さによるものであろう。

布団叩く音のくもつてきたりけり

根岸 善行

布団を叩いているうちに曇って来たのか、曇って来たので布団をとり込もうとして布団を叩いているのか。奥様がご病弱でいられるので、旦那さまがなさっているのだろう。会社では重役、武骨な（失礼）善行さんが、干布団を叩いている様子を想像すると、思わず微笑がこぼれる。（以下略）

風土集



神蔵 器選

昼月や加曾利の丘の蓬摘む 千葉 小林 共代

切株の揃はぬ長さ囀れり

暖かや埴輪翡翠のペンダント

貝塚の貝の白さや冴返る

むらさきに縄文のむら陽炎へり

曼陀羅や腕にかけたる春コート 尾崎 大森 美恵

目の合ひぬ昨日の場所に寒鴉

初大師去年の根付の売れずあり

早春の塗り直されて城の壁

風光る荷をもちかふる書肆の前

法灯の油凍れる奥比叡 阿南 島 玲子

大寺のお軸の無罣^{むけ}梅二月

一瞬にみどり走れる新若布

黒潮の岬を回して鳥帰る

縄文の勾玉碧し二月尽

歩かねば行けぬ旅あり春の雁 三鷹 布施まこと

早春のひかりの奥の農夫かな

春の雨天文台をけぶらする

美術館に「種播く人」や山笑ふ

紙漉きの村の入口三楹咲く

薄氷に鷺脚高く上げにけり 上尾 根岸 善行

布団叩く音のくもつてきたりけり

庭土と空濡れてゐる二月かな

滾々と山動きだす路の臺

如月や雲を溢るる日の光

立春の戸にはさみたる走り書 川崎 井上 あい

山菜莢や日向ひろぐる早雲寺

つぐみ来て地鳴きひとこゑ春浅し

曲り家の屋根をつくろひ梅真白

刺のなき薔薇さすバレンタインの日